

さんのへ 秋まつりの昔

さんのへ秋まつりの起源

「さんのへ秋まつり」は、三戸大神宮の祭礼が起源となります。同神社は、文禄元年（1592年）、26代当主の南部信直が、三戸の地を鎮守するため、伊勢神宮から分霊したとの伝承があります。これにより、創建から「神明様」と呼ばれ、地域の振興を集めてきました。

記録から、「宝暦11年（1761年）に、三戸の町民たちから神輿が寄進された」とあり、この頃から祭礼として神輿渡御が行われていたと考えられています。現在の同神社の神輿は、文政9年（1826年）に、盛岡藩主の南部利済によって寄進されたものです。宝暦11年に寄進された神輿は、同心町熊野神社の神輿へと引き継がれました。



同心町熊野神社の神輿（宝暦）

江戸時代のまつり

文政9年（1826年）9月16日に行われた三戸大神宮例祭のようすが『太神宮祭礼行列之事』に記されています。

これによると、行列の次第は「火消したち↓数組の神楽↓4台の屋台（現在の山車に相当するもの）↓数組の踊り集団↓5台の屋台↓給人（藩に仕える人）たちと稚児行列↓神社の宮司と神輿」の順番となっています。次第は全部で40集団あり、総勢400人以上の大行列となっています。



五の弁財天立像（町指定文化財）



五丸の大黒天立像（町指定文化財）



三戸大神宮の神輿（文政）

明治以降の山車

江戸時代まで行列の順序に変化はありませんでしたが、明治に入ると、それまで商家で出していた屋台だけでなく、各町内会で製作された山車が参加するようになります。明治13年（1880年）では、同心町からブリキ製の『おかめ』、八日町からは『鯉の滝登り』、下町（現在の二日町）からは『因幡の白ウサギ』などが出されているのが確認されます。

その後、山車は競うように大きくなっていきますが、大正時代に入り、町内に電線が張り巡らされたことにより、それまでの背の高い山車から、横に広い山車へと変化していきます。しかし三戸では、迫力ある背の高い山車造りが追求され「ドンデン返し」という仕掛けが考案されます。これは、山車の頂点に付く絵板が電線を通過する際に折りたたむことができる仕掛けで、現代の山車にも採用されています。

〔地域学習サポート事業資料〕
（抜粋）

大 正末～昭和初期

三戸の山車



同心町の山車（弁慶の引摺鐘）



二日町の山車（土蜘蛛戻り橋の場）



城南の山車（弁天小僧）



久川・義和会の山車
（十和田開祖八の太郎南僧坊問答の場）



元木平の山車（桂小五郎 女志士）



下在府小路町の山車（新門辰五郎）

（写真提供：三戸町教育委員会）